

幼稚園教育學講義

— 神戸に於ける講義 —

文學博士 谷 本 富

第四章 幼稚園の教育と

新哲學

前三回の講議で既に幼稚園教育の實際問題は略ぼ説き盡して居る。否今日までのお話で理論の大體はつきて居る。乃ち此の上に各自の勉強と才とに依りて効果を擧げるのである。勿論單に勉強と才と丈では事の完全を期することはむづかしい。學說理論を十分に研究して、此の道の知識を持つて居て、然る後に勉強し才を利用せば效を奏することも又一入多いことであらうと信ずる。即ち幼稚園保母には必要なる五條件がある。

一、職業として明瞭の感

二、天然兒童に對して興味を持ち且つ兒童取扱

に對する自然の才幹

三、兒童に對する科學的の素養

四、宗教的觀念つまり信仰

五、哲學特に最終の條件は今後に於て最も必要である。

そこで今日まで述べたことを考へて見ると次の様なことが云へるのである。

(一) モンテッソーリは科學的根據は持つて居るが宗教及哲學の素養が十分でなかつた、それは單に低能兒教育を土臺とした爲であらう。

(二) ロバートオーウエンは社會學の根據を持つて居る、然し彼の哲學は卑近のもので、高尚とは云へぬ。

(三) フレーベル氏は信仰と哲學とを有して居る

然しそれは舊哲學である故二十世紀の今日、このフ氏の哲學を全然取るなれば、そは少し時勢に後れるものと云はねばなるまい。

蓋しフレーベルは哲學者であらうが、哲學史中には彼の名を擧げてない、そは彼は哲學者としては第二流乃至は第三流であるからである。彼の著書 *Education of Man* 即ち『人類の教育』の中には基督教主義的哲學思想が十分に現はれて居るが悉く獨創的ではない。フ氏より前には如何なる哲學者があるかといふと、彼の有名なシェーリング、フヒテ、などであつてそれに影響されて居る。

シェーリングはカント直後の三大哲學者の一人であつて、十八世紀の始頃の人である。フヒテも亦カントその中の一人である。フレーベル以上二人の思想を受けて居る。フレーベルはその親友がヒファイテの弟子であり、彼の妻女も亦その弟子であつた所から、一層影響を受けて居るのであらう。従つて吾々が今日のフレーベルの哲學を學ば

んとするには、必ず前にあげたシェーリング及フヒテの二人の哲學を研究せねばならぬ。自分が嘗て獨逸に留學中試に組立てた積極的の教育といふのも此のシェーリングの哲學に據つたのである。

斯くてフ氏の哲學の三要件はと云ふと、一、宇宙 二、美 三、象徴であつてかの六種の恩物が此の偉大な宇宙を表現したものであるとは、人のよく知る處であるが、その基はシェーリングの美哲學より來たのであるとは知つて居るかどうか。

又人間の進歩に目的があるといふこと、又宇宙に意志のあること、而して萬有進歩は道德といふものが最後の目的であるといふ様に考へて居る所はフヒテよりとりたるものである。

要するに奇麗な象徴的の方面はシェーリングに依り、内容の充實はフヒテに依るとでも謂へやうか。

一千八百三十二年に世を去つたクラウゼといふ人はフレーベルの親友にして、この人も亦人類の

理想論といふ書物を書いたが、フ氏の「人類の教育」と、その思想が全然同一であるといふことは認めることが出来る。

フレーベルの哲學を八ヶ條に分ければ左の通りである。

第一、人間とは如何なるものか、人間の本體如何

勿論人間は親の子であるといふことが出

来るが、廣い意味から云ふ時には三つのものの子であるといふことが出来る 一面人の子

一面自然の子 一面上帝の子(神の子) 故にフ

氏の幼稚園教育に於ては、神性の發揮に重きを置いて居る、然しこれは舊哲學思想である。

第二、宇宙は千態萬狀なれ共其裏面には一貫原理がある教育はこれを發揚すること。

第三、教育といふものは元來萬物がどうなるかと云ふことを考へて其の原理を知らねばならぬ。即ち萬物の歸趣と云ふことである。それを知らねばならぬ。此の歸趣(Destiny)を啓示

する事が教育の本領であるこれを人間に及ぼして考へると即ち人間の神性を發揮することである。これが大原則である。

第四、そこで何よりも大切な事は人間を思慮分別あるものとする事、言葉を変へて云へば自覺することである。所謂自覺とは人間は常に喜怒哀樂もある、けれ共結局神的統一の出来る自覺のある人とすることである。

第五、教育の本體の性質。

何處までも受動的(Passive)であるものである自然の儘において餘計な干渉をせぬ事。即ち神性發揮の障害物を除く丈にすること。

第六、道徳に重きをおくといへ共、命令を出すことは成る丈控へること、即ち第三者(傍觀者)の位置にある心得が必要である。

第七、人間には三方面があるといふことを心得て居なければならぬ而して此の三面を普遍的に發達することが必要である、これが教育の

目的である。自分で發達すると云ふこと、即ち Auto-education が必要である、所謂人間の三面とは如何なるものかといふに、シエリングの見方は次の様である。

神性

三面自然

人間

此の三面が表に現はれては色々の形をとつて居るのが、統一した時には神性となることが出来る。言葉を變へて言つて見ると、三面の中に一面があり、一面の中に三面があると云ふ妙處に在る。

そこで神性は統一、自然は雜異、人間は個性と看することも出来る。此の個性といふものは統一でもなければ雜異でもない、否統一の中にも雜異、個性があり、個性の中に統一雜異があると見ることが出来る。此の説は西洋流の考へ方だが、昔から支那では、三才と云つて

居る。三才は天地人である。故に幼稚園に於て又家庭に在りて子供を見る時には天の子であると同時に自然の子として又人の子として見なければならぬ、佛教では平等即差別と云ふことをいつて居る、即ち平等の中に差別あり、差別の中に平等がある、之を今日の哲學的に考へると統一——平等、雜異——差別であるが、悲しいことには平等がたゞに平等といふ言葉のみにて十分の研究をされて居らぬ。たゞ惡平等、惡差別を避けんとして居る有様のみである。それと云ふのも佛教に於て個性のことに就いての研究が乏しく、従つてそれについて進歩した知識のないことは残念である。

第八、平等であるとか個性であるとか色々に云つて見るが、歸する所は靈的本質である。つまり人は物質に非ずして靈であつて、教育は此の本質の發揮であるといふことを、フロエ

べは強く云つて居る。これは丁度佛教で云ふと佛性がある、この佛性を發揮せねばならぬといふのと同じとである。然るに佛教にありては佛性といふものを兎角消極的に解釋して居る憾がある。何はともあれ以上擧げた様な事は、何れも舊哲學的のものであつて、これを Idealism と云ふ。物を離れたもので、つまり理念論とでも云ふべく、*Absolut Idealism* と云ふ絶對論で、又一面から云ふと *Objective Absolute Idealism* (客觀的絶對的唯心論) にしてそれにはシエーリングの美、フイヒテの宇宙論の意が含まれて居る處にフレーベル氏の哲學の妙なる處がある。然し今日否今日以後に於て此の哲學をその儘依然用ふべきか否かは大いなる問題である。そこで今後の幼稚園は矢張りフレーベルによるかと云ふ問題は自から起つて來るのである。然し今日これに對して今後の幼稚園をフ氏によるかよらぬか

は斷定しないでおくとしても、何はともあれ時勢が變つたと云ふただけは、先づ心に考へて置かねばならぬ。ところがその時勢の變ると云ふことは、誰もよく知つて居ながら、實際はなか／＼よく分かつて居ない。時勢は果して如何に變るかと云ふと略ぼ次の様である。

- 一、Democracy になること。(幼稚園も同じこと)
- 二、勞働を尊重すること。
- 三、知識の價値に關する見方が變る。(昔と今は

知識に對する考が變つた故、幼稚園の方法も變へねばならぬ。)

先づデモクラシーの意味から説かう。

世間では往々眞の意味を知らないで、只危険思想の様に思つて居るが、眞のデモクラシーは決して危険なものではない。デモクラシーは國家主權の問題でなくて寧ろ政治であるが、つまり *Government of the people, government by the people, and government for the people* でなければ

ば眞のデモクラシーではない。而してそれは正當に解釋すると、固より吾が金瓶無缺の御國體とは敢て抵觸しない。天壤無窮の寶祚を繼承せらるゝ皇室の宛も太陽の如くに六合照臨の下に、此のデモクラシーは立派に行つて行ける。否それは元來政治の問題であるけれ共、小さくしては又一家族の中でも云へる。主人の爲めに他の家族は奴隸となつて居る様なことは出来ない。若しそんなことがあればそれはデモクラシーでない。乃ち其處に政治的のデモクラシーと社會的デモクラシーがあるといふことが出来る又國際的デモクラシーもある。今日米國大統領ウイルソン氏の曰ふ國際同盟はそれである。而してこれ等の基礎になるべきものがあるこれは即ち産業上のデモクラシーである。つまり資産家と勞働者との關係を一變する事である。若しこの産業的革新が十分に出来ないならば、そは教育が未だ十分進んで居らぬのである。併しその一番の根本になるものは哲學で、哲

學が變れば自然思想も一變し延ひて産業も變つて來るのは云ふまでもない。

凡そ知識の見方に新舊の二つがる舊い見方は即ち物心二元論で一方を尊び一方を賤むといふこれは舊哲學である。フ氏も亦之れに屬する。即ち高く圓滿具足した理想があるか、實際は極めて不完全なものであると云ふ考へ方は舊哲學である。靈肉の輕重論は舊哲學である。併し今後此等の思想がその儘に許されるかどうかは疑問である。

又人間には叡智がある、そしてこの叡智あるといふことが人間の間たる所で、結構なものであるが、一方には又感情がある。この感情は卑いもので、叡智は高尚なものであると云ふ見方をして居る説も舊い哲學である。

又人間には理性といふものがある、この理性に對して本能といふものがあるが、理性を目あきであつて本能を盲目と考へて居る説も舊い哲學である。又神を偉大にして尊いものとして人間を賤い

ものと考へて居るのも舊い哲學である。これ等の説の行はるる間は眞のデモクラシーは行はれないのである。

新しい哲學の見方はさうでない。人間といふものはつまり慾の塊である。即ち Wants 又は needs が根本の力であり、その爲めに生きて居るといつて差支はないであらう。所謂慾は二つである。即ち(一)は自分の體を維持する本能、(二)自分の子孫を保持する本能、木石ならぬ人間は結局經濟と家族制度より離れることは出来ぬ。此の本能なるものは活動性に富んで居る。それ故に進歩するのである。動く活機は即ち本能である。禪宗の坊さんは只悟りを開くと云ふが悟つた丈では何も出来ぬ皆の者が悟つたばかりでは國家はどうなるであらうか。國家社會は進歩發展のためには活動しなければならぬ。活動の原動力は慾である。

然らば此の慾には智慧がないかといふとたゞに盲目的なものではなく直覺である。本能にも直覺

のあるといふとを忘れてはならぬ。即ち知力とは本能が障礙物にぶつつかつた時に起るのである障礙物に出逢うて後、先きを考へる、そこで思慮や分別も出来るのである。知力の價値は單なる空理空論ではなくて實際に合はねばならぬ。眞理の眞理たる所は實際に適するものでなければならぬ。

今後の幼稚園はフ氏の貴族的理想的のものではいかぬ。それより一變し佛國のベルグソン氏の哲學に置き變らねばならぬ過度期ではあるまいか。ベルグソンの哲學の他と達つて居る點が三つあるその一は、宗教をといて居らぬ、二、唯心論とも違ふ、三、科學とも違ふ。今までいつて來たフレーベル氏やモンテッソーリ氏も此處までいつて居らぬ。即ちベルグソンの哲學を根據にして幼稚園をとく人は今迄東西ともにないが、自分がかねて幼稚園の教育も在來のフ氏の哲學がベルグソンの哲學におき代はらねばならないであらうといふことを考へて居た。

そこで西洋にも隠れた所には随分自分と同じ考
の人があるに違ひないと思つて居たが丁度私が此
講演をするに就て注文した書籍の中に H. E. Hunt
といふ人の Psychology of Auto-education (1912)
と云ふ小冊子があつて、自育の心理と云ひ、表題が
面白い上に、それには「ベルグワンの『創造的進
化論』中に與へられた、智力の説明に基づきて」長
い小書が附いて居るか、その内容の餘りに貧弱な
ので實は落膽したのである。彼の云ふ所に依ると
教育といふものは結局物の關係を知らせること
である而してその關係には六つあるといつて居る。

一、時、 二、場所、 三、同、

四、異、 五、特殊と普遍、 六、原因結果、

以上の如き六つの關係をといて居る。か、ベル
グワンの智力論の代に、本能論を何故取らないの
か氣が知れぬ。これが眞に羊頭狗肉である。従つ
て幼稚園教育をベルグソン哲學で以て改造しやう
と云ふのは、懼りある申條ながら只今迄の所では

斯く言ふ拙者でゐる呵々。

* * *

因にベルグソンの哲學は早稻田大學出版の金子
馬治氏外一名合譯の『創造的進化』を一讀せんこと
を勧める。又警醒社出版の錦田義富氏の『ベルグ
ソン哲學』も入門としては好い。(文責在筆者神戸幼
稚園志賀末子)

○みどり會々報

東京女子高等師範學校保育實習科卒業生より成るみどり會は
既に會員百餘名に達し、その多くは全国各地の幼稚園に於て育英
に力をつくし居らるゝ事なるが、此程有志の發起に依り、同會々
報刊行の企あり、目下各方面に準備中にて、其第一號は七月中に
は發刊の運びに至るべしと。